

第14回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成24年6月26日（火曜日）午前11時から正午まで
- 2 場 所 東京都美術館
- 3 出席者 石原都知事、猪瀬副知事
杉本評議員、野村評議員、花柳評議員、福原評議員、森評議員
逢坂専門委員、太下専門委員、片山専門委員、菅野専門委員、草加専門委員、
後藤専門委員、長田専門委員、中村専門委員、西巻専門委員、大和専門委員、
吉本専門委員

4 議 事

オリンピック文化プログラムについて

5 報 告・東京都美術館視察

- (1) 都立文化施設のリニューアルについて
- (2) 東京都美術館視察

6 発言要旨

○福原会長 ただいまから、第14回東京芸術文化評議会を開会します。

お忙しい中、ご出席いただきまして、ありがとうございます。

本日は残念ながら、安藤評議員、蜷川評議員、宮田評議員、平田評議員の4人の方がご欠席になりました。特に、蜷川先生にはロンドンの文化プログラムでシェイクスピアの『シンベリン』の公演をやって大成功されたので、そのことを今日はお伺いするはずでしたが、おいでになれなくて、大変残念でございます。

早速でございますが、事務局から本日の資料について説明いたします。

○文化振興部長 お配りした資料についてご説明申し上げます。参考資料「2016オリンピック文化プログラム」は、2016年オリンピック招致の時の文化プログラムの写しでございます。資料1はオリンピック招致に関するスケジュール、資料2はロンドン及びリオ・デ・ジャネイロのオリンピック文化プログラム、資料3は都立文化施設のリニューアルについての資料でございます。以上でございます。

○福原会長 ただいまのご説明のとおりでございます。今日はわずか30分の短時間ですが、オリンピック文化プログラムについて、皆様のご意見を一言ずついただければと思

っています。その後、今週末から開催される大変好評のマウリッツハイス美術館展をご覧いただき、改装後の東京都美術館の状況もご覧いただければと思っています。

次第に沿って会議を進めたいと存じます。オリンピック文化プログラムについては、東京都は2020年オリンピック・パラリンピックの立候補都市に選定されました。オリンピックはスポーツの祭典であると同時に、文化に対する取り組みがとても重要な要素であります。東京都がオリンピック招致を実現するためには、東京の文化の特徴を生かした東京らしい文化プログラムをつくって、世界に対して強くアピールしていく必要があると思います。また、そのようにできる能力を私たちは持っていると考えています。

この評議会において皆様のお知恵をいただきながら、東京のオリンピック文化プログラムを検討させていただきたいと思います。まず、事務局から説明していただきます。

○文化振興部長 本日の議題は、オリンピック文化プログラムでございます。

前回、2016年大会招致の時のオリンピック文化プログラムは、幅広い参加により東京の文化の多様性を発展させることをテーマに、日本の持つさまざまな価値観や文化の多様性を活かして、「Festival Tokyo」や「Tokyo Thousands Knots」などのプロジェクトに取り組むこととしておりました。

残念ながらオリンピック招致はかなわなかったのですが、この文化プログラムに記載したプロジェクトに、都は既に取り組んでおります。それが乳幼児でもクラシックに親しめる「ラ・フォル・ジュルネ」や、東京の夜を一日アートで盛り上げる「六本木アートナイト」などのプロジェクトでございます。

本日の評議会で皆様方からご議論いただいたことを踏まえまして、秋に予定している次回の評議会までに、2020年のオリンピックの文化プログラムを検討し、来年1月の立候補ファイルにそれを反映していく予定でございます。

参考までに、7月からのオリンピック開催を控えて今ロンドンでどのような取り組みが行われているのか、簡単にご紹介いたします。

カルチュラル・オリンピアドと銘打ちまして、イギリス全土で1,600万人以上が参加するプロジェクトが行われております。その主なものがワールド・シェイクスピア・フェスティバルでございまして、この4月から37カ国語で全作品が上映されております。本日も欠席ではございますが、蜷川評議員が演出され、阿部寛さん、大竹しのぶさんが主演された『シンベリン』も招待され、大好評を博しました。

また、ロンドン2012フェスティバルも先週から開催されております。1万2,000以上の

イベントにより1,000万人以上の観客動員を見込んでいるそうです。

オリンピックスタジアムの脇には、既に高さ115メートルの塔「オービット」が出現しております。イギリスを代表するコンテンポラリーアーティストのダミアン・ハーストの展覧会も半年間開催されております。

また、ダイヤモンド・ジュビリーとして、去る6月3日にはテムズ川に1,000隻もの船が集結して、エリザベス2世女王の即位60周年記念式典を行うなど、多くのプロジェクトが展開されていると聞いております。説明は以上でございます。

○福原会長 オリンピック招致を実現することになりますと、都民の支持はかなり大きな条件になってきます。I O Cの調査では、東京でのオリンピック開催に賛成とした都民は47%で、開催地の中で最低のレベルにあるわけです。都民から多くの支持を得ていくためにいろいろなことが必要だと思いますが、文化面での取り組みも重要になっていると思います。

ということで、今日、皆様からヒントなり、サジェスチョンなりをいただければと思っています。花柳先生から、一言、お願いできますでしょうか。

○花柳評議員 前回の東京オリンピックは、もうかなり前、昭和39年です。その時にたまたま舞台に俳優として出ておりました。外国人の観光客が大勢来るといっているので、日本舞踊の紹介にかなり多方面の場所、例えばナイトクラブのようなところでも古典芸能を披露し、お客様が大変たくさん集まりました。

もう時代が違うのですが、今そういう施設がないのです。古典芸能をある程度外国人にもわかるようにショーアップして、割と短時間でおもしろく見せる方法が大当たりしたものですから、今回もそういうことをやったらどうかと思っております。もう50年近く前になりますが、それが非常に当たって外国人の観光客がたくさん来ましたので、そういう意味では観光産業にも非常に貢献できたと思います。

○福原会長 ありがとうございます。野村先生、続いてお願いします。

○野村評議員 今、花柳さんがおっしゃったことを受けて申し上げますと、やはり伝統文化の中の、非常に簡素である、素朴である、質素であるというところに大いに視点を当てた、創造的なものが生まれてくるといいのではないのでしょうか。部会などでぜひご検討いただきたいと思います。

○福原会長 ありがとうございます。杉本先生。

○杉本評議員 前回の1964年の時は東京が敗戦の痛手から立ち直って、東京という近代都

市ができるきっかけになりました。高速道路や新幹線なども建設されました。

今度2回目の開催が決定されるとなると、前回から半世紀以上経つわけですから、半世紀以上経った成熟化した日本の社会において、社会の構造が今後どうあるべきか、そのことが大きなテーマ設定となっていくと思います。ある意味ではちょっとネガティブなことになるかもしれませんが、世界が今直面している社会、成長の可能性が少なくなってきた成熟化した社会において、文化やスポーツがどういう形で展開されるべきかが問われるでしょう。後期資本主義というのは破壊を尽くして、もうこれ以上先がない。その次に何が展開できるのか、文化の力をもって今後やっていけるのだという政治性とも言える宣言を、浮ついたテーマではなくて、莫大なお金を使わなくてもいいから、新しい世界のモデルを提示する、オリンピックはそういったことを表明できる場でありたい、そのように思うのです。抽象的ではありますが、成熟化社会に何ができるかという大きなテーマ性を打ち出すことによって、世界の知識人の層にも、よりアピールできるのではないかと思います。

○福原会長 ありがとうございます。森評議員、いかがですか

○森評議員 今、杉本委員から大変難しい形で出されました。それに合っているかどうかわからないですけども、伝統と現代を対局にとらえるのではなくて、やはり積み重ねで今があるという考え方も必要だと思っています。

今、アジアは文化的にも世界からとても注目されています。先進国がアジアの美術観や文化にとっても注目しているので、展覧会をする際もグレーター・アジアという枠組みで、アジアのクロスロードの文化の歴史をとらえる。それから、もっとアジアを広げて、カザフスタンやトルクメニスタンなどの中央アジア、その辺も含めてのアジアという新しいとらえ方で文化を表現して、日本はアジアの一員だという意識を高めていったらいいのではないか。クロスロード・アジア展とか、グレーター・アジアというようにとらえ方ができるといいのではないかと思います。

○福原会長 ありがとうございます。日本文化や東京発信ということにこだわらないで、結果としてそれが見えるようにアジア全体に広げるというお話だと思います。

考えてみると、蜷川さんがシェイクスピアをロンドンでやったということも伝統と現代の結びつきであり、しかも日本人が日本語で演じることは世界をシンボライズする意味でも、とても意味のあることだと思っています。そういうふうには枠を広げて発想しないといけないということですね。

○杉本評議員 あともう一つ、外国人の中では芸能も含めて日本の文化から多大な影響を

受けている人が数多くいらっしゃいます。例えば、19世紀のアイルランドの詩人W. B. イェーツは日本の能に触発されて、能仕立ての『鷹の井戸』という作品を書きました。そのような例は挙げればきりがありません。日本からの文化発信を受けて、西洋の中に取り込まれたものを集大成して、日本でもう一回それをやってみるという試みは、我々が世界に影響を与えているということを実証することでもあり、世界と日本の関係を今一度見直すことができるという大枠のテーマとなって、おもしろいと思うのです。

○福原会長 先日、三菱1号館で型紙の展覧会をやっていました。日本の型紙がいかに関西に影響を与えたか。あれもそういったことの1つであって、それなりに成功したと私は思っています。

評議員の皆さん、4人の方にそれぞれご意見をいただいたわけですが、ここにいらっしゃる専門委員の方はいかがですか。

○後藤専門委員 ちょうど先週、6月21日から24日まで、京都で国際文化経済学会を開催したばかりです。40カ国以上から350人以上の研究者が集まり、国際文化経済学会大会としては最大規模となりました。しかもヨーロッパとアメリカ以外で開催したのは17回目で初めてのことで、海外、特にヨーロッパから大勢の方がいらっしゃいました。日本人は100人ぐらい、250人以上が外国人という大会での文化プログラムをご紹介します。

学会のことなので小さなものですが、まず京都にお住まいの山折哲雄先生に京都の都市形成・都市景観について宗教学の観点からお話しいただきました。それから、同じく京都にお住まいで昨年若くして未生流笹岡の家元になられた笹岡隆甫さんに生け花パフォーマンスを会場で行っていただきました。バックに能の音楽を使ってパフォーマンスをされたのですが、大好評で、参加された方々は非常に感銘を受けたと思います。

そのほかに、京都の祇園祭のお囃子に近いのですが、重要無形民俗文化財の六斎念仏を子供たちも交えて大勢で来ていただき、懇親会で上演していただきましたが、これも大好評でした。特別セッションとして「無形文化財とアジアの視点」というシンポジウムも行いました。日本の無形文化財政策は1950年から始まっています。ユネスコが2003年ですから、世界に50年も先駆けてやっています。私もパネリストの1人として出たのですが、九谷焼の職人さんにインタビューしまして、日本の工芸の現状と課題について話しました。

現代的なものとしては、京都にある国際マンガミュージアムで、ベルント先生というドイツ人の女性の先生が、マンガミュージアムが形成されてきたことと日本のマンガ文化が表裏一体であるというお話もしていただきましたが、これも非常に好評でした。

ですから、今、皆さんがおっしゃったように、現代と伝統をそのまま見せるということで、十分日本の魅力は伝えられます。日本は無形文化財を中心として継承されてきている貴重な文化が多く、それが現代的なものに結びついているという点ですごくアピール力があります。

それから、何より海外の方が驚いたのは、非常にスムーズにオーガニゼーションができていて、みんなの力でスムーズに大会が運営されていることでした。そういう日本のいい点はアピールする力があると申し上げたいです。

○福原会長 ありがとうございます。後藤先生は国際文化経済学会の会議で東京誘致を実現され、今年は文化経済学会の会長として主催されました。日本でそんなことができるかという前評判だったのですが、見事成功しました。大変学ぶべきところは多いと思っています。知事、何かございますか。

○石原知事 皆さんからオリンピック招致のための文化活動のために、いろいろアイデアを出していただいております。決して水を掛けるつもりで言うわけではないのですが、オリンピックのビディングゲーム（招致ゲーム）は非常に見えない部分が多い。何が吸引力であるかはよくわからない。

例えば東京が招致に当たってどういう文化事業を展開するかということも1つの吸引力になるでしょう。例えば先ほど森さんが言われたような、オールアジアという形の文化的なパフォーマンスは、それが1票持っているアジアの国々に対してどういう吸引力があるかわかりませんが、日本独特のものというよりも、日本がアジア全体を引っ張っていくのだというイメージが、文化行事でも展開されると非常にありがたいと思います。

皆さんには文化の面でご協力いただくのですが、オリンピックのビディングゲームは全くわからない。2016年については、コペンハーゲンで開催されたIOC総会でアメリカや日本が敗れ、結局リオに決まりました。ロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会会長に、昔、中距離の名選手だったセバスチャン・コーという人物がいますが、私たちがコペンハーゲンで負けた時に、彼が私たちのブースにやってきて、僕を見つけて、とにかく日本のパフォーマンスは最高だった、ずば抜けていた、金も潤沢でうらやましい、しかるになあと言って、肩をすくめて帰っていきました。つまり、それがビディングゲームの性格を非常に表している。

皆さんにアイデアをいただく文化事業の展開が、どれだけ強い吸引力があるかはわかりませんが、できるだけそれが1つの求心力になって働いてくれればと思います。1つ、

そういう性格のゲームの中で皆さんのお知恵を借りているのだということを念頭に入れていただきたい。

それからもう一つ。この間、大阪に用事があって行きまして、大阪市の橋下市長という話しました。文楽について聞きましたら、努力しない、全然自助努力がないので、面倒を見てやれないと彼は言っていました。ドナルド・キーンさんはある新聞であれを残さないといけないと言っていますが、東京に持ってくると人気が出るけれども、大阪では人が来ないのです。

余計なことかもしれないですが、もうちょっと現代的なテーマ、ほかのテーマもやった方がいいのではないかと思う。歌舞伎なども、成功か不成功かわかりませんが、猿之助がスーパー歌舞伎をやっています。人形芝居はそういう努力をしていないのですか。東京で違う形で引き受けたら、東京でつなげると思います。

○杉本評議員 文楽に関しましては、昨年夏に『杉本文楽 曾根崎心中』という公演を神奈川芸術劇場でやりました。猪瀬副知事にもいらしていただきました。おかげさまで、全公演満席でした。あまりに好評な公演だったので、従来から文楽を創ってきた関係者たちからは多少疎まれました。やっぱり、クリエイティブは外注したほうがうまくいくのではないかという証拠になってしまったわけですね。国が保護して、いわば官僚制度的な構造の中で「文楽」という組織体を作ってしまうと、どうしても時代に即した新しいものが瞬時に生まれてこない。なかなか自由なものできてこないのが日本の体質の問題です。猪瀬副知事がよくご存じです。こういうものは民間に任せたほうがはっきり言うとうまくいくのです。

○石原知事 文楽は今そういう有り様になってしまったのですね。

○杉本評議員 例えば、文楽協会は、大阪市から補助金をもらってきましたが、その費用は新しい創作活動には使われているとはいえません。文楽という体制の維持管理費になっているだけです。

○猪瀬副知事 杉本さんは、映像と組み合せて舞台の奥行きを別に作りまして、新しい形で文楽をやられたわけです。そうすると満員なのです。杉本さんは神奈川でやられました。

○杉本評議員 杉本文楽は決して奇をてらったものではなくて、近松の原文を掘り起こし古典のオリジナルに忠実に従った、いわば原点回帰の作品だったところが、かえって評価されました。公演を観にきたフランス人プロデューサーが絶賛してくれて、来年秋、パリのテアトル・ド・ラ・ヴィルという劇場から招聘を受けました。海外から、通常行われて

いる演目のお呼びがかかるならばともかく、杉本文楽となると、日本では風当たりが強いところがあります。出演しているのは同じ人たちなんですけどね。何かおもしろいこと、前例がないことをやろうとすると、「いや、それは前例がない」というコトバになって、なかなか事がすすまない。そこには新しいものを生み出せない土壌があるように思えるのです。

○石原知事 人形遣いたちの問題じゃなくて、その後ろにいる…。

○杉本評議員 人形遣いも、太夫も三味線も本当は自分たちの好きなことを、独創的なことをやりたい、そして世界中からその評価も得たいのです。しかしながら、現状では文楽を管理している側がいて、その枠組みの中で通常の公演が綿々と行われています。文化の創造構造をもう一度見直す必要があるようです。

○福原会長 いずれにしても、今のような応答の中から私たちが学ぶべき点はあるのです。つまり今までの構造で何かものと考えたら、あるいはやったらだめだということですね。

私も杉本文楽は拝見しましたが、確かにすばらしいです。

○石原知事 振りなども花柳さんがつけてやったらいいのではないですか。

○花柳評議員 今度、オーケストラと日本舞踊でコラボいたします。

○福原会長 副知事、何か一言。

○猪瀬副知事 日本人の支持率は47%。これはやはり考えられない数字です。今、若い人たちはテレビや新聞を見ないのです。20代、30代はほとんど全部ネットです。ニコニコ動画など、そういう新しいものが勃興していますが、そういうところに今言った考え方をどういう形で徹底的に入れこんでいくかだと思います。特に、20代、30代の支持率が低いのです。東京オリンピックを経験した世代はみんなやりたいのです。その人たちにうまく伝わっていない。そのあたりをどうするかを考えないといけない。ジャポニズムやグレート・アジアなど、そのとおりだと思います。それを外国人にプレゼンするよりも日本の若者たちにどうやって浸透させるかが一番大きいと思います。

○福原会長 ありがとうございます。

大変重要なヒントを短時間の間に皆さんからいただきまして、ありがとうございました。今いただいたヒントをもとにし、ここにいらっしゃる専門委員の皆様で検討を進めて、次回の評議会で私たちの意見をとりまとめたいと思っております。よろしく願います。

それから、今日、ここにわざわざおいでいただいたのは、改装の終わりました東京都美術館でやっておりますマウリッツハイス美術館展の内覧をしていただくためでもあります。

この美術館の改装は、取り壊すか改装するかということで随分もめました。この芸術文化評議会の前身みたいな組織でこれを取り壊さないで中身を改装しようということに決めまして、その後、皆さんに検討していただいた結果、この躯体を生かしながらずまずのリニューアルができたのではないかと考えています。

それについて、事務局から説明していただきます。

○文化振興部長 報告事項でございますが、都立文化施設のリニューアルについてでございます。今回はここ東京都美術館のオープンを視察いただくことが主な内容になります。今、会長からもお話がございましたけれども、この評議会等での議論を踏まえ、東京都美術館は前川建築のたたずまいは残しつつ、コストを最小化しながらリニューアルいたしました。

特に企画棟でございますが、天井高を従前の3.2メートルから4.5メートルにかさ上げし、大型の展覧会も開催可能な美術館として生まれ変わりました。

秋には、芸術劇場のリニューアルオープンも予定されております。まずはマウリッツハイス展をご覧いただきたいと思います。

○石原知事 東京都美術館は改装する時に非常に選択に苦悩しました。大体、企画展が少なく、私が視察する直前にフェルメールのとてもいい展覧会をたくさんやっていましたが、素晴らしい作品を持ってきても、展示する部屋がほかと同じように天井が低くて、非常にうっとうしくて見栄えがしなかったのも、そこだけは最低変えようということになりました。それから、エレベーターその他のアクセスも非常に悪かったので、それも変えました。公募棟にはあまり手をつけず、いい展覧会をやる企画棟だけを直せということで、最初は160億ぐらいだった予算を110億ぐらいに切り詰めて、今日のような状態になりました。公募棟はごく質素に今までのままにいたしまして、選ばれた作品を展示する企画展示室だけを見栄えのいいものにしました。それをご承知の上、ご覧ください。

○福原会長 ありがとうございます。

以上